

# 十一面観音について

## —国宝六体について探る—

33期生

### I テーマ設定の理由

大阪の小学校に転校してきてもう四年がたつ。転校した当時は、初めてみる仏像、大きな寺にずいぶん驚いた。その古いもの、歴史あるものへの驚きは、今もつづいている。

そしてこの七月、自由研究のテーマ決定を急いでいたとき、偶然、平凡社ギャラリーの「国宝十一面観音」という本を手にしたのだった。パラパラめくると、一つ一つ個性のある美しい観音像の写真が何枚かのっていた。

この四年間、風土や、寺院や、仏像について漠然と感じていたことが、急にはっきりした形をもったように思えた。これが、十一面観音をテーマに選ぶ理由となった。

### II 研究方法

- (1) 十一面観音は全国にたくさん残っているが、幸い、国宝指定の六体が自宅から日帰りで行けることがわかったので、今回は、それらに限って調べることにした。
- (2) それぞれについて、寺名、時代、作者、像の特徴などを文献で調べる。また寺の場所、交通機関、家からの所要時間も調べて、寺の見学のスケジュールを作る。
- (3) 次に実際に六つの寺を訪ねて、十一面観音を拝観し、印象、特徴などをつかみ、伝承などについて、住職や堂守りの人に、お話をうかがい、ノートにまとめる。また、写真もとっておく。
- (4) 最後に各寺、各像の特徴をぬき出し、文献とつき合わせてまとめる。

### III 研究結果

#### 1. 十一面観音とは何か。

- (1) 観音は観音菩薩ともいい、1・2世紀頃から信仰された。法華経の中にある観音経に「観音は、種々の姿に変化して、人間のあらゆる悩みをすくう」と書かれている。そのために、いろいろな形の観音がつくられている。その種類は、聖観音、十一面観音、千手観音、不空罽索観音、馬頭観音、如意輪観音、准提観音である。菩薩とは仏様になろうと、修業されている人のことである。それ故に如来に比べて形も、より人間に近く、装飾品も多くつけているのが特徴である。
- (2) 十一面観音の頭上の十一面は、人間のあらゆる感情をあらわし、このような人間の全ての悩みをすくうといわれている。そしてそれぞれの面は、次のようなことを表わしている。

- 正面(3) — 慈悲を表す
- 左(3) — 忿怒(怒りを表す)
- 右(3) — 白芽(賞讃を表す)
- 後(1) — 大笑(嘲笑を表す)
- 頂(1) — 如来を意味する  
(ないものもある)



2. 国宝指定の六体の十一面観音を保存する寺について、及びそれぞれの観音像について
- (1) 寺について(分布図、所在地、寺のおこり)



- 道明寺 — 大阪府藤井寺市道明寺一丁目  
聖徳太子が尼寺として建立。もともと土師氏宅で、土師寺といわれ、後に道明寺となる。本尊は、この十一面観音像。
- 法華寺 — 奈良県奈良市法華寺中町  
光明皇后が総国分尼寺として建立。本尊は十一面観音。他、多くの文化財を保存する。もと、藤原不比等宅
- 聖林寺 — 奈良県桜井市下  
藤原鎌足の長子定恵が開山し、江戸時代、文春諦玄が本尊地藏菩薩を安置してから聖林寺と呼ばれるようになる。
- 室生寺 — 奈良県宇陀郡室生村室生  
八世紀末に、僧賢愷によって建立。高野山が、密教の道場として厳しく女人を禁止したのに対し、この寺は、女人の登山を許したので「女人高野」とよばれた。本尊は如意輪観音像。
- 渡岸寺 — 滋賀県伊香郡高月町大字渡岸寺  
聖武天皇が、僧秦澄に命じて建立。後に浅井、織田氏の姉川の戦いで焼失。明治になり、向源寺の住職信徒等が発起人となり、向源寺附属観音堂として建立された。
- 観音寺 — 京都府綴喜郡田辺町  
天武天皇の命で、義淵僧上開基。藤原氏の氏寺興福寺の別院として、一時は寺勢をほこったが、度重なる火災で、殆んど焼失。観音堂だけを残す。

## (2) 観音像について

## 比較

寺名	道明寺	法華寺	聖林寺	室生寺	渡岸寺	観音寺
像高	97cm	100cm	209cm	196cm	195cm	173cm
材質	ひのき一木	ひのき一木	木心乾漆	ひのき一木	ひのき一木	木心乾漆
作者	菅公	問答師	不明	不明	泰澄	不明
製作年代	平安中期	天平	天平	平安初期	平安初期	天平
光背	放射状に広がる棒状 	ハスの花と葉を交互に組み合わせたもの 	宝相華模様 	濃淡の着色で仕上げる 	焼失	焼失
十一面のつき方	頭上に十面。本面と合わせて十一面(本面=顔)	頭上に十一面	頭上に十一面	後ろの大笑面がなく、本面と合わせて十一面。	耳の後ろに二面。合わせて十一面。	本面を入れて十一面。
安置場所	木の厨子	木の厨子(淀君寄進)	コンクリート収蔵庫	金堂の中(他の仏像と)	コンクリート収蔵庫	木の厨子
装飾品	かんむりと首飾り、じゅず	かんむりとうで輪	なし	かんむりと首飾りとうで輪など、非常に多い。	首飾り、耳飾り。(耳珞)	当時のものなし
印象	うす暗い厨子の中でよく見えなかったが、小さくて、かわいい顔をしていた。	顔つきは、とても厳しいが、唇に残る朱色のせい、やはり女性的。	金箔がはげ、表面はきたなくみえるが、大きく堂々としていて男性的。	ふっくらした顔つきで、たいへん女性的。聖林寺の仏像と対象的。	腰をひねって立った姿は、たいへん女性的で顔もやさしく少女のようである。	金箔はすっかりはげ落ち、真黒で光っていた顔つきも少年のようである。

※ 木心乾漆 — 木の心のまわりにだんだん肉づけし、(紙、布などで)最後に漆をぬり、金箔をはって仕上げる仏像などの製作法

※ 光背 — 仏像の背面をかざるもの

※ 厨子 — 仏像を入れてある箱

## 各観音像の伝承(エピソード)

- 道明寺 — 菅原道真がこの十一面観音を彫るにあたり、試しほりをしたといわれている。現在重文に指定されているその像は、一般に公開していないが、文献によれば、国宝指定のものより、頭が大きく、プロポーションが悪いということである。
- 法華寺 — この十一面観音像は、光明皇后の姿を写したといわれる。境内には、有名な「から風呂」などのほか、会津八一さんが、この観音を見て、赤い唇の朱のことを、「ふじわらの おほきさききを うつしみて あひみるごとき あかきくちびる」と歌った歌碑もある。
- 聖林寺 — ここの仏像は、もともと三輪の、大御輪寺にあったが、明治初年、神仏分離によって、寺は廃寺となり、仏像は、離散となった。この時、聖林寺の当時の住職が、観音堂に安置したのが、この十一面観音が、この寺へ来たゆえんである。のちフェロノサが、絶賛して、自ら金を出して厨子をつくったりしたが、十年前、火災の防止のため、もう少し上の方に、コンクリート収蔵庫をたてて安置している。
- 室生寺 — 寺が広くて、仏像も多いためか、この十一面観音にだけの説明、資料などは以外に少なく、お寺でもどの人に聞いていいのか、わからなかった。ただ、この観音が、六体の中で、もっとも装飾品の多いことからすると、一番人間に近いのではないかと思った。
- 渡岸寺 — 姉川の戦いで寺が焼かれたのは述べたが、この時、付近の部落の人々は土中にこの観音像をうめ、戦火から守ったという。その跡が、境内に今もある。この寺では、付近の小さな部落の人が堂守りをしている。
- 観音寺 — 資料もまったくなく、訪れる人も殆んどなかったので、住職さんに話を聞いた。ここの像は、ふだんは厨子の中に入っていて、公開しないが、拝観の人がくると、開けて見せてくれる。住職さんの話で印象に残ったことは、「観音は、単なる美術品として見るのもよいが、あくまでも信仰の対象であることを忘れてはいけない。また、その信仰に支えられてきたのだから、それから離して、立派な収蔵庫に入れられて、観音は果して幸せだろうか。そこらへんを、よく考えてほしい」ということである。

## IV まとめ

今回の研究はとてもむずかしかった。反省点は、どういう角度から調べるのか漠然としていたことである。また、わからない言葉が次々と出て来て、調べれば調べるほど、深い霧の中へ入っていくような感じがした。

しかし、ともかく現地へ足をこび、実物にふれたこと、像を守ってきた人々の話を聞くことができたこと、この二点は収穫だったと思う。渡岸寺がもっともよい例だが、十一面観音は、民衆の強い信仰の力で支えられてきた。そして、どの寺へ行っても、仏像の姿の奥にある心を見ようよと注意された。だが、それはとてもむずかしいことだと思った。この研究がその第一歩になればと思う。

(参考文献) 美の観音/望月信成・古寺巡礼/和辻哲郎・各寺院資料・パンフレット等